

---

# THE CREATOR ~僕と創造主と英雄~

白木 告

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE CREATORS 僕と創造主と英雄

### 【ノード】

N7362X

### 【作者名】

白木 告

### 【あらすじ】

魔法学校に通う14歳のリム。

授業中ドラゴンが町に現れ、そこを間一髪で謎の男・ドルに助けられる。

ドルとその仲間の仕事は、神、と名義付けられたものと戦っていくことだ!?

## これが現実！？（前書き）

1話、2話、3話はほぼプロローグ扱いでお願いします  
ただ、読んだ方が面白く読めます

## これが現実！？

「おー、リム！聞いてんのか？」

先生の言葉で我に返る。

ああ、まだ学校だつたか、と気が付き、やっしゃつた、と思ひ。

この国にいる15歳までの子供は、魔法学校に入る」とを義務付けられている。

今、『魔法』というものが見直されているのだ。

この国では15歳になれば成人であり、この『世界』にある国のほとんどがそのような制度を取っていた。

リムもあと一年経てば成人であり、魔法学校で学ぶことも少なくなってきている。

なのに、だ。この有様である。

最近こういうことが多く、いきなり眠気に襲われ、気付くと寝てしまっていることが幾度かあった。

「すいません。聞いてませんでした」

なんというか、ふわふわしたような感覚が残つていた。  
夢を見ていた、と思つ。でも、もう何を『視た』のか、思い出すことすら出来なかつた。

「お前なー。次やつたら放課後残すぞ」

言われながらも、リムはもう話を聞いてはいなかつた。

こんな魔法なんか学んだところで、自分には何もできやしない。  
リムの成績は、学校の中では中堅どころで、いいとも悪いとも言えなかつた。

俺にだつてきつと何か出来ることは有る筈なのに……。いつも考  
えはそこに行きつづ。

だからと言つて、学校そのものは嫌いではなかつたし、友達と話  
すのも楽しかつた。

「この魔法の組成はこうなつていて……」

また先生が話し始めたとき、リムは窓の外に驚くべきものを見た。

「ドラゴンだ……」

そのとき、ドラゴンが町の上空で雄叫びを上げる。

その耳をつんざくような金切り声に、他の生徒もドラゴンに気付いた様だった。

「なんでこんな所にドラゴンがいるんだ!」

「ド、ドラゴンって……どうなってんだよ……」

クラスを大声が飛び交う。

そんなクラスを本来なら先生が収めるべきなのだろうが、先生も「落ち着け」とばかり言つてくる。

そんなとき、町全体に広報のようなもので放送が流れた。「町の上空にドラゴンが確認されました。

魔法壁を町の上空に張るので直ちに

パルテルスの収容施設に避難して下さい。

魔法壁は10分程度持つので慌てずに避難して下さい」

その放送が終わる頃にはクラスには誰もいなかつた。

「やべつ。俺も急いで」

リムも教室を出て駆けて行つた。

リムが腕時計をチェックすると、

上空からまたあの金切り声がした。

恐る恐る空を見ると、案の定、ドラゴンはもう魔法壁を破つてきていた。

「おいおい、まだ5分も経つてねえぞ……早すぎだろ……」

リムも10分持つとは思つていなかつたが、さすがに7・8分は持つだろ?と思つていた。

逃げなきや、早く。リムは、パルテルスに逃げるのは得策ではない、そう思った。

魔法壁ですら5分持たなかつたというのに、建造物である収容施設がドラゴンの攻撃を防ぎきれると考えるのは些か無理がある。

空を見上げれば、ドラゴンは口を皿一杯に開けて火球を打ち出そうとしていた。

……これ、俺を狙つてね？  
なぜかは分からぬが、そう感じた。  
ヤバい。

火球が飛んでくる、その間に逃げ切るしかない。  
リムは魔法で脚力を強化すると、火球を待つた。  
ドラゴンが業火をまとった火球を打ち出す。  
その刹那、リムは猛ダッシュで走り出す。

打つた後なら、方向を換える事は出来ない。できるだけ遠くへ逃げる。

火球が、何かにあたつた音がした。  
リムは、後ろを見て愕然とする。

収容施設は燃えていた。真っ赤に。

「みんなが……。あそこに、あそこにいるのに……」

リムは震えが止まらなかつた。

振り返り、空のドラゴンを睨め付ける。

「……………」  
ドライゴンがギロリとリムを見る。

「……………」  
リム・セラミード！

リムがそう叫んだその刹那、リムの後ろに魔法陣が現れ  
そこから尖つた岩石の様なものがドラゴンに殺到する。  
だが、ドラゴンはそれを物ともせずにリムに向かつて滑空して來た。

かわす暇さえなかつた。

早えーな、俺の人生。

リムがそう思い、ドライゴンがリムを喰らおうと口を開けたその刹  
那だつた。

視界の中に何かが光つた。

目の前には男が立つていた。その男は、凄まじい勢いで襲い掛か

るドラゴンを難なく刀一本で止めている。

腰が抜けてしまった。脆くもへなへと地面に座り込む。

「間に合つた、とは言い難いがあセーフだろ。

だが、ヘルハウンドにキマイラ、ガーゴイルにオーガときてついにやドラゴンかよ。気でも狂つたか、あいつら」

口を挟むことも出来なかつた。さらに男は続ける。

「腰が抜けるなんて、情けねえな……。この緊張じや、まあしじうがないか。

おい、シーナ。こいつ安全な所まで連れて行つてやつて」とすると、後ろから強い力で持ち上げられ、連れて行かれた。肩を貸してくれている、この少女がシーナなのだろう。（まあリムよりは1つか2つ年上に見えるが）

そんなことを考えていると、首の後ろを強く打たれ、リムの意識は闇に落ちた。

男は、ほつら、来いよ、と言わんばかりの余裕なのにも関わらず、凄まじい威圧感があった。

ドラゴンは尚雄叫びを上げよつとしたが、男の威圧感に負け、逃げるようになんでいった。

「いい子だ。」

男はそう言ひつと、ドラゴンについて行つた。

ドラゴンが飛んでいた先には、黒いロープを被つた男がいた。

その男は驚いた様に言つ。

「貴様……ドル。何度我等の邪魔をする」

男……ドルが答える。

「何度でもさ。お前等は、一体何をしようとしてる?」

お前等の新しい魔法とやらも、どうにも胡散臭い」

黒いロープの男は鼻で笑い、応えた。

「お前か知り得る事ではない。だが、こつ話している間も、紋章を持つ者は我等の手に落ちている。

今に、知りたくなっても知ることになるぞ」

訝しげに眉をひそめながらも、ドルは聞ついれずに訊ねる。

「それも……。どうも腑に落ちない。お前等だつて分かつての筈だろ?」

今、俺とあいつはひとつだ。お前等が考えよつも無いスペックだつて事が」

「分かつてゐる。それでも尚、貴様を消せると考えてる、ということさ。

後残る駒は……。クリエイター創造主足りえの者のみ。もうこの町に用はない」とすると男は空中に魔法陣を描き始めた。男の姿が消え始めたとき、ドルは言つ。

「それと、お前等のボスに伝える。調子に乗り過ぎんじゃねえ。現実を見せてやるつてな」

「それには応えず、男は去つて行つた。独りになつたドルは呟く。  
「創造<sup>クリエイタ</sup>主足りえる者、ねえ……」

## これが現実！？（後書き）

はじめまして、白木告シラキツケルです。この作品は、初めての投稿になります  
構成や、盛り上げ方が足りない、もっとリアルな方がいい、などの  
感想はどんどん言って下さると嬉しいです。至らない私ですが、どうかお付き合いをお願い致します。

## 幕開け～力を得るために（前書き）

やつと2話をお読みました。

3話でリムの14歳は終わります。

どうぞお付き合いをよろしくお願ひします

## 幕開け～力を得るために

「起きたか」

田の前には男が立っていた。

「お前、名前は？」

「リム。あなたの名前は？」

名前を訊ねられたので、相手にも訊ねた。

「俺はドル。宜しくな。」

手を差し出されたから思わず反射で握ってしまった。

学校で手を握るだけで、成立する契約もあると言われたから、少し渋い顔になってしまった。

それを見落とさず、ドルが言つ。

「手握つただけで、契約が成立するつてか？」

そんな狡いことしねーよ。めんじくせーし。」

リムはもうそんな事は聞いていなかつた。すごい剣幕で、ドルに訊ねる。

「みんなは……町のみんなは、どうなつたんだ？」

「死んだ、だろうな。だから最初に言つただろ。聞に合つた、とは言い難いって」

リムは歯の奥を強く噛み締めた。

「ドーラゴンは……なんで現れたんだ……。知つてゐんだろ？教えてくれ」

「あれ？ 気付いてると思つたんだけどな。まあいい、教えてやるよ、お前にはちょっと酷かもしけないが、な」

リムは心の中で一つ、考へてゐることがあつた。それは、「のドルの言葉で、確信に変わつた。

「俺が、狙われたのか？ だとしたら、何で？ 何で俺なんだ？」

「知らんつ」

ドルはそうきつぱり言つ切つた。

「お前が狙われたのは間違いない。だけど、今回の件では、腑に落ちない事が多すぎる」

「やうか……。やっぱり俺が……。俺がみんなを殺したんだな」「強くなりたい。俺に、今の俺に何ができるというのか。そう思つと、いてもたつても居られなくなつた。

「俺に、いや、俺を、強くしてくれ。強くなりたい。力が欲しい。もうこんな思い、一度とごめんだ。

あなたは、とんでもなく強いんだろ」

「まあ、別にいいが、弟子入りとなるとなあ。うーん。それを決めるのはお前だが、少し話しておこう。

俺は、まあ厳密には俺たちは、何でも屋でもないが、そういうのをやつてる。何でも屋つつても、規模は国や村単位、しかも、神がらみのが多い。

お前、神つて何かわかるか？」

リムは、学校で習つた教科書どうりの答えを述べる。

「人智を超えた力を持つた、魔力とかが桁違いの化けもんだろ？」

「まあ、7割正解つてとこかな。神は、それぞれ勢力や力があつて、弱いやつはホントに弱い。

それに、人智を超えた力つて言つても、神はそれぞれ一つしかそんなんの持てない。

例えば、予知、空間回帰なんかがそうだ。それに重要なのが、神は、1つのエネルギー体のようなものだつてことだ。自ら無限のエネルギーを作り出せるのは神だけが持つ力だな。

まあ、そんなモンと戦つたりするわけだ。お前は、音をあげないと約束出来るか？

出来ないなら去れ。出来るなら、一緒に来い。お前は仲間だ」「答えはもう決まつていた。

「俺に、そんな凄いことが出来るかはわかんないけど、でも、もう決めたんだ。苦しんで、それでも戦う。戦つて死ぬつて」「リムがそう言うと、ドルは感傷に浸るように言った。

「死ぬことは無だ。どんなことを成したとしても、死んだら何にもならない。カツコ悪くとも、どんな恥ずかしくても、生きる。目の前にあるものを、死ぬことで投げ出すのは、ただの逃げでしかない。俺の師が、俺に言ってくれた言葉だ。死ぬな、生きろ。強くなりたいなら、生への執着を捨てない事だ。仲間を守つて死ぬのは美德じゃない。死ぬ事に、カツコイイもへつたくれもありやしないんだ。お前の友は、お前が死ぬ事を願つていてるか?どんな形であれ、生きていることにこそ意味があるんだ。

綺麗事かもしれない。でも、死んだら終わりだ。生きる事を捨てんじゃねえ。判つたなら、付いてこい。お前に力をやる。生きるための力を」

気持がこもつていた。リムは、自らの愚かしさを嘔みしめながら、付いて行つた。

そこにはまるで修行場かのような場所が有つた。四方に岩の様なものが散乱していて、無駄に広い。

「お前、ここの岩に向かつてお前の言つ魔法つてやつを撃つてみる」ドルはいきなり切り出した。リムは疑問を抱きつつも、すぐに応じる。

「セラム・セラミア」

岩が、魔法陣から現れて殺到する。

元々あつた岩は、ほとんど削られることなく、そこに残つていた。「ふん。やつぱりか。お前のそれは、魔法とは言い難い。まあ魔法といえば魔法だが、本質をとらえていない。それは、転移魔法であつて、攻撃魔法じゃないんだ。

攻撃魔法つていうのは、こいつのなんだよ

ドルはそういうと、右手を岩の方にあげる。

轟音とともに、稲光が光る。音が凄まじい音を上げて砕けた。

「すげえ威力だ……」

リムは驚嘆した。ドルはゆっくりと続けた。

「これをこきなり使うのには無理があるが、基本を教えてやる。」  
「こんな風に、この岩を切れ」

そう言つと、ドルはドルの右側にあつた岩を、いとも簡単に切つてみせる。

「それが、魔法の基本? なんで?」

「それも含めて、お前への課題だ。一日以内に切つて見せろ」

## 幕開け～力を得るために（後書き）

この話の主人公は、ドルなんではないのかといつも自分で思っています  
が実際はリムです（笑）

## 戦士の資質（前書き）

ついに終わりました。短かったのに、めちゃくちや長く感じました。  
次話には少し時間がかかると思います。いいものにしたいので。

## 戦士の資質

「剣が岩に弾かれる大きな音がする。

「くそつ。全然切れねえじゃんかよ」

もうこうして100太刀近く切りつけているのに、まったく効いていないようだつた。

リムは倒れ込み、空を仰ぐ。

「俺の魔法は魔法じゃなくて……。 岩を切るのは魔法。 何が魔法なんだ？」

「教えてあげようか？」

リムはすぐさま声のした方に向き直る。

「お前……シーナ？」

「あ、覚えててくれたんだ」

「一応、命の恩人の一人だからな」

「命の恩人……。 いわれて悪い気はしないわね」

それを聞きながら、リムは話を戻す。

「さつきの……別にいいよ。 こんぐらい、一人でやれる」

シーナは、ふふっと笑うと言つた。

「あなたは、そのままじゃ絶対に魔法なんて使うことはできない。 言われたでしょ。 本質を理解しろって」

「本質って？」

「あれ？ 助言は要らないんじゃないの？ まあ、いいけど。 本質って いうのは、魔法を発動する基、とでもいうべきなのかな。 それを理解しなきゃ、絶対に使えない」

リムは、少し考えたような表情になつた後、顔を輝かせた。

「あんがとつ。 わかつたよ！ 俺は、剣で切ろうとしてたから駄目だつたんだな！」

切るのはあくまでも俺。 俺と剣は一体で……」

シーナは驚嘆した。 リムの言つてることは正鵠を射ていたから

だ。

リムには戦士の資質があるかもしだい。シーナはひそかにそつと思つた。

「あんたが言つてることには、確かに本質ではあるけど……それだけじゃない。

もう一つ……もう一つ、本質はある。それは、いつのボスがやつしたことの中ヒントがある。

あんたら、それだけでもう判るはずよ

その頃……

「本当にあれで良かつたのか？あれば、魔力吸収石だ！」  
センルはドルに問う。

「出来なきや諦めりやいいだけの話だろ。それこ……“あいつら”に狙われたんだ。

アイツはやるよ」

「仮に発現したとして、生半可な力じや吸収されて終わりだ」  
センルはあくまでも悲観的だ。

「そうだな……。お前には話しておくか」

話は長く続いた。

「俺がしなきやいけないのはあれを切ること、それを具現化すること……

そうかっ。ドルは、だから俺に切ることを見せたんだ。  
見たことのあるものしか、具現化できない！……それだ！」  
リムは飛び上がった。ところが……見たことのある、ひとつ

ことを利用するのは間違いない。  
すると、おのずと道は見えてきていた。

「切る為には……。それを具現化するといつ強い意思が必要。  
そうだ。間違いない」

リムは岩に向き直り、剣をかまえる。

ゆつたりと落ち着き、切れるイメージを持つ。

自然と、剣にまで魔力が満ちていくのを感じながら、意識的に魔力を剣と腕の周辺に集める。

大きく息を吸い込むと、思いつきり剣を振る。

「斬るひつつひつつ……」

轟音が修行場から響いて来て、ドルはセンルに笑いながら「な、言つただろ?」などと無責任なことを言いつつも修行場に向かつた。そして、修行場の有様を見て目を見開く。

「粉々、か。切つたとは言い難いが、初めてで切れるとも思つてなかつたしな。」「まあ、十分だう」

内心の驚嘆を押し隠しつつもドルは言ひ。

明らかに魔力をしつかりと固めずに切つたのだとわかる。だが、それなら普通は弾かれるのが、田の前にあるこの山は粉々だ。

相当な魔力のキャティパシーである。こんなふうに粉々に意図して出来るのは、自分の仲間の中でも6人居る中でも自分とセンルぐらいのものである。

「これで、俺を強くしてくれのか?」

リムが問うてきたので、ドルは手で制しながら笑う。

「まあ、そう急くなつて。お前は、まだ15いつてないだろ?」

15になるまでは、俺が手ほどきしてやる。

15になつたら、“何でも屋”で働け。それまでで、俺たちのことを知つていけばいい。

「いいだろ?」

ドルは、そう言い終わるとリムを見た。

「そりやそうだ。慣れないことを全力でやりやそつな。しようがない。寝床に連れてつてやるか」

リムは倒れ込むようにして寝ていた。安心感と、疲れが来たのだ

る。い。

「お前がさつを語っていた」と、あれは、あながち間違いではない  
かもしけんな」

セントルはドルに言ひ。

ドルはそれには応えず、少し笑つただけだった。

## 戦士の資質（後書き）

次話からついに話は急展開していきます。  
ひとつひとつの話の中に最後への伏線をガンガン貼つていきたいと思つて  
ます。  
そこも見ながら読んでくれると幸いです。

## 初任務（前書き）

やつですね。これから投稿に1週間ぐらいかかると思います。  
すみません。

## 初任務

「リム、お前の初任務が決まったぞ」「ドアが開き、ドルの声がする。

「やあ～っときた～～」

「この日から、運命の歯車は再び回りだすで、任務は？教えてくれよ」

「今回の件はいろいろと複雑でな。簡単に説明すると、スチューデ地方のオホワ～って村に行け。

何か起きてるらしいから

はあ～？と思いながら、リムは切り返す。

「そんな簡単でいいのかよ。何すりやいいのか分かんないじやん」

「それもお前が探すんだよ。……まあ、センルが一緒だから、心配することはないだろ」

するりとかわされてしまった。

確かにセンルの実力はこの一年間の修行を通して知っていた。幾度か手合わせしただけだが、それだけでも、実力の差を思い知られた。

それに、ドルはあまり外には出さないが、センルのことを見たことを一番信頼しているように見える。

「実力もあるが、それ以外にも何かあるように見えた。

「ある程度遠いぞ。気を付けてけよ」

ドルの言葉で現実に引き戻され、ああ、と頷く。

荷物は出来るだけ軽い方がいいということだったので、簡単に済ませてもう出発になつた。

行くぞ、とセンルが言い、ああと応える。

ここから、波瀾万丈の初任務が始まつた

「遠いのに、歩いて行くのな」

「今回の件は、急を要するわけじゃないからな」

セルルは簡潔に答え、さらに付け加える。

「それに、今回はお前の初任務だろ。一つ、ある程度有名な街に連れてつとけと言われている」「

「なんで?」

「お前の生きてきた世界は狭い。出来るだけ大きな世界を見た方が、大局觀を養える、だそうだ」

セルル自身もあまり納得はしていないのか、ドルに言われたでありますことをそのまま言つ。

「まあ、途中にある街に寄るだけでいいな」

「俺としては、早く任務に就きたいしな」

ほう、とセルルは思う。そんなこともあって、アイツは、こんな面倒くさいことを言つて来たのか。

その後は二人とも黙つて歩いた。

「そろそろだな。見えてきたぞ。スチューディーの町、カステルだ」  
リムは目を見張る。でかい。自分が生きてきた町の、比にもならない。

「ここで少し休んだら、オホローに向かう。もう近いぞ」

ああ、と頷きながら、周りを見る。

「まず、飯を食おーゼ」

もう半日近くも食事を取つてなかつたのだ。セルルも腹が減つていたのか、そうだな、と言つと、近くの店を指差しながら、あそこにしよう、と続けた。

その店は、バイキングのような形式で、リム、セルル共に大量に取つてきた。

それを食つたまでは良かつたが、リムがおかわりを取りに行つた後が最悪だった。

「お前、それは俺のだろ!」

リムの大声がする。

「お前こそ何言つてんだよ！俺が先に取つただろ！」

食事くらい、静かに取れないのか、そつ思いながらも席を立つた

……その時だつた。

背後に強力な魔力を感じる。咄嗟に振り返ると、“黒き翼”的員の様だつた。

おいおいまさかな……と思いつつもリムの方を見やると、やつぱり喧嘩してゐるのは“黒き翼”だつた。

厄介なやつに喧嘩を売るなよ。

ホントにそう思つたが、止めるべきだらう。ふたりは、斬り合ひまで始めているのだから。

「なんだよ、やんのか？」

相手が啖呵を切つてきたから乗つてやつた。

「やつてやるよ！」

言下に剣を抜いて一気に間合いを詰め、横殴りの剣を叩きつける。思い知つたか、そう思つたが、相手はしつかりと受けっていた。さらにその衝撃を上手く使いながら死角である左手に回つてくる。

相手もこゝぞとばかりに強烈な一撃を放つてきた。

リムは後ろに飛びのきかわすと、隙を狙つて剣を突こうと一気に寄つた。

すると、いきなり剣が目の前に現れた。

あぶねつ、と一気に引いた。

「やめろ、リム。場を考えろ。それにお前が喧嘩したそいつはそこまでもないが、そいつの連れは、お前より全然強いぞ」

「なにつ

反応したのは、喧嘩相手の方だつた。

「本当だらう。ここで話すのも面倒くさい。出るぞ、リム」

センルはさつさと出て行つてしまつ。

リムもついて行つたが、争つていた飯を食つていくのを忘れなか

つ  
た。

## 初任務（後書き）

いろいろわからないうとあると思いますが、それは次話でおこない  
説明していくとします。

## オホロー（前書き）

来ました。次話で神が現れるところまで行きたいかなーなんて思つて  
ます。

「待てよ」

店から出たリムたちを、喧嘩相手が追いかけてきて声をかける。

「あんた……何者だ?」

「あんたとは、俺のことか?」

センルが問うと、喧嘩相手は頷いた。

「人に名を問うときは、自分から名乗るべきだと思うが」

別に名乗つても良かつたが、相手の名を知つておきたかった。

相手は少し躊躇つたが、決めたように言つた。それだけ、センルに驚いたのだろう。

「俺は……シガだ。ほら、名乗つたぞ。あんたも教えてくれよ」

「俺はセンルだ。名乗つたぞ。じゃあな、『黒き翼』のシガとやら」

センルはさっさと歩いて行ってしまった。

傍から見ていたリムが慌ててセンルを追いかけていった。

「行つたか」

デュラスに問われ、シガはああ、と頷く。デュラスは気付いてい る部分があつたのだろう、続けた。

「あいつらは恐らくドル一派だろくな。あのセンルという男には見覚えがある」

「あのセンルって奴、相当強かつた。近距離で戦つてゐる中を両方にあたらないように剣を突きだすなんて、生半可なことじやない」

実際は、センルが躊躇いもなく剣を突きだせたのには違つ理由があるのだが、そんなことをシガが知るわけもなく。

「切り替える。任務の遂行に全力を尽くせば良い。聞きたいことは、隊長に聞けばよいだろ?」

デュラスがそういうと、シガは頷いた。

そうだ。俺は“黒き翼”なんだ。

「なあセンル、黒き翼ってなんだ?」

センルは問わねば教えてくれないと思つたのか、リムが訊いた。

「俺も良くは知らんが……。一般的な知識として、異能者の集団だと言われてる」

「異能者ってなんだ?」「めん、よく知らなくて」

リムは少し悪そくに訊いた。

それに気づいているのかいなかつたが、センルはそれに気がついていた。それから答えた。

「異能者っていうのは、普通の人間には持つてない力を持つてゐることを言つ。

異能者といつことがわかつたら、歳などに関係なく黒き翼に送られるらしい。

やつらの仕事の多くは、国家間の紛争の解決や、内戦の終結だと言われているが、実際のところは分かつたもんじやない

「じゃあ、あいつも?」

「まあ、そうだろうな」

リムは驚いた。あいつ、なんかそんな凄いやつだったんだ、と。

次会つたら、決着付けてやる。

「見えてきたぞ。オホワーだ」

センルが指差した方を見ると、確かに村が見えた。

長閑な雰囲気の、田舎つていうのが一番似合つてる村だった。

「あそこで、何か起つてるんだな」

「そつらしげが……傍から見ても、変化は見受けられないな」

確かにそうなのである。まさに普通の村であり、何かが起きているなどとは、俄かには信じられない。

「面倒くさいが、村の人聞き込みをすることから始めるしかない

な

ホントめんどくさい。

「じゃあちやつちやと片付けちやおづぜ」

「すいません。この村でなにか異変みたいなものが起きたりしてませんか?」

「いや、そんなことは聞かないけどね~」

毎回そんな返事が帰ってきて、リムは肩を落とす。本当にこの村では何も起きていないんじゃないのだろうか、そう思つてきていた。

「センル、ホントにこの町でいいのか?」

「間違いはないはずだ。だが……そうだな。ドルに聞いてみるか」センルはそう言つと、剣を振る。剣から溢れ出る魔力が形を成し、そこにドルが映る。

「ん? どうした?」

ドルの声が届く。凄い力だな、とやっぱり思つ。一年前までの俺じゃ想像もできないことなんだから。

「オホワーに着いたまでは良かったんだが……。この町に異変と見て取れるものはないぞ」

ドルは眉を寄せながら言つ。

「やっぱりか。確かに怪しい依頼ではあつたんだがな」

「怪しいというのは如何いうことだ?」

「ポストに手紙が入つていたんだ。そこにオホワーで異変が起きてるつて、助けてくれつて書いてあつた」

「センル、危ないっ」

なんと、センルを包丁を持った村人が襲つていたのだ。

リムは剣で包丁を弾く。センルは振り返りその村人を押さえつけると畳倒させた。

一人で顔を見合わせる。やっぱりただの村じやなかつた。

「ありがとう、ドル。もう少しやってみるとする」

ドルは頷くと、消えた。

「その手紙の送り主を探せばいいんだろ？」

俄然面白くなつてきたと、テンションが上がつたりムが言つ。センルは頷き、続ける。

「この能力……。洗脳系の力だな。神の仕業か。しかも、村人全員の洗脳をしてるとなると……」

「強いんだな？」

「まあ、ある程度は、な」

面白いじやん。やる気がめっちゃ湧いてくる。

「よつしゃ、探そうぜ！」

さつきまでとは比べ物にならないテンションの高さで、リムが言う。

再び探し始めたが、手がかりになるような人は居ず、ただただ時間だけが過ぎて行つた。

「センル！あの外れにある家じやねえの！？」

確かに、そこには家が建つていた。村の外れに。ポツンと。

## オホロー（後書き）

神つてすごいね。何でもできるし。  
でもこの話で言つ神つていうのはすごい力持つてるだけで、何でも  
できるわけじゃないんだよな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7362x/>

---

THE CREATIOR ~僕と創造主と英雄~

2011年11月17日21時09分発行